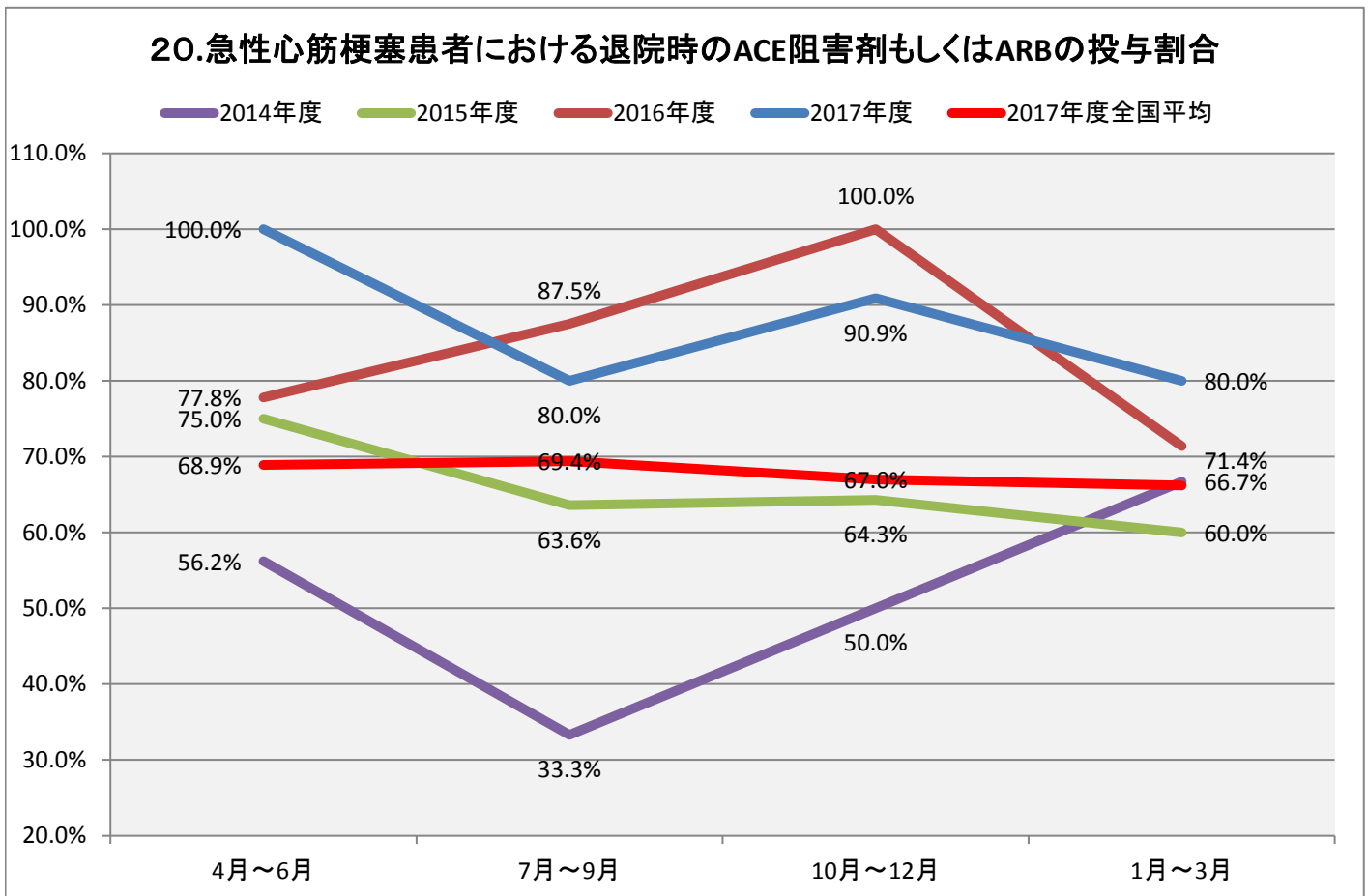


20.急性心筋梗塞患者における退院時のACE阻害剤もしくはARBの投与割合

(1)調査結果



調査期間	4月～6月	7月～9月	10月～12月	1月～3月
2017年度	100.0%	80.0%	90.9%	80.0%
2016年度	77.8%	87.5%	100.0%	71.4%
2015年度	75.0%	63.6%	64.3%	60.0%
2014年度	56.2%	33.3%	50.0%	66.7%
2017年度全国平均	68.9%	69.4%	67.0%	66.2%

(2) 指標の説明

急性心筋梗塞は、通常発症後2～3ヶ月以内に安定化し、大多数の患者さんは安定狭心症または安定した無症候性冠動脈疾患の経過を辿ります。心筋梗塞発症後の長期予後を改善する目的で、抗血小板薬、β-遮断薬、ACE阻害剤あるいはアンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬(ARB)、スタチンなどの投与が推奨されています(日本循環器学会ガイドライン)。この処方率は海外の医療の質の評価指標としても採用されており、広く認識された指標であるといえます。

(3) 定義

分子: 分母のうち、退院時にACE阻害薬もしくはアンジオテンシンⅡ受容体阻害薬が投与された患者数
分母: 急性心筋梗塞で入院した患者数

(4) 考察

当院では、退院時処方徹底を行い、高い投与率を保持するよう努めています。しかしながら、症状が安定してから外来で少量ずつ開始する場合があります。患者さんの状態に合わせて、継続していきたいと考えています。